

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

英語教育における「実行動機づけ」の役割と成果

著者	櫻井 千佳子, 岡野 恵, 竹内 幸子, 戸谷 比呂美
雑誌名	The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要
号	2
ページ	89-99
発行年	2012-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000021/

英語教育における「実行動機づけ」の役割と成果

櫻井 千佳子、岡野 恵、竹内 幸子、戸谷 比呂美

1. 序論

近年の大学教育の多様化に伴い、大学英語教育の在り方も大きく変化している。文部科学省の中央教育審議会「学士課程教育の在り方に関する小委員会」が提言している「学士力」を定着させるために、卒業後の社会で外国語をコミュニケーションの手段として使えるようになるよう、より実践的な外国語教育が求められるようになってきた。特に英語については、国際共通語としての英語、という認識が広がり、英語を実際に操れるようになるための英語教育が模索されている。小学校の英語活動の必修化、高等学校での英語のみを使用した英語の授業などの改革が進み、大学での英語教育も、より実用的な側面に焦点があてられる内容を行うようになってきた（鳥飼、2011）。その教育内容の中でも、ESP（English for Specific Purposes）は、「専門英語教育」として、「学習者がある特定目的を達成するために、特定のタスクを効果的に実践できるように手助けする言語教育の1つである」（寺内編、2010）として考えられており、教養課程と専門課程を繋ぐ可能性が期待されている。

本稿では、武蔵野大学環境学部環境学科環境学専攻において実施されている「環境英語入門1、2」の授業での取り組みを紹介することにより、ESPにおいて「実行動機づけ」がいかに重要であるかを考察する。同授業での事例を研究することにより、学習者自らの興味分野に関する英語を学ぶことは、学習者への「実行動機づけ」に大きく貢献し、ESPで言われているところの、英語教育における自律的な学習の推進に役立つことを論じる。

2. 背景

ESP研究とは、学習者の専門分野における具体的な目標に基づいた英語教育であり、1960年代以降、主に理工系英語として発展してきた。寺内編（2010）によれば、ESP研究は、第1期と第2期にわけて考えられる。第1期とは、レジスター分析、レトリック・ディスコース分析の時代を経て、学習者が将来どのような目的や状況で外国語を使うようになるかを考察するニーズ分析が発展してきた時代を指す。第2期になると、その専門分野のディスコースコミュニティでは、どのようなジャンル（例えば、学術論文やスピーチ、プレゼンテーション等）での英語を使いこなさなければならないかという観点にたったジャンル分析が盛んになり、その観点からのESP教材の開発が続いたと考えられている。

このようなESP研究の発展をふまえ、寺内編（2010）では、21世紀の大学英語教育におけるESP指導実践について次の5つの提言をしている。

提言1：自律（自立）した学習者を育成するという意識を持つ

提言2：ESPをコアカリキュラムに入れる

提言3：ESPの基本的な特徴を理解する

提言4：専門教員と連携する環境を準備する

提言5：ツールとしてコンピューター（ICT）を活用する

（寺内編、2010、p.14）

本稿では、「提言1：自律（自立）した学習者を育成するという意識を持つ」という点に注目し、学習者の自律を推進するためには、ESPにかかわる教員は、Dornyei（2005）で言われている「動機づけを高める英語指導ストラテジー」を実践することが有用である、ということ提案する。この「実行動機づけ」については、次節以降で後述するが、個人の目標関連行動を促進する手法であり、「体系的で長続きするプラスの効果を実現するために、意識的に与えられる動機づけの影響」を指している。ESPは、学習者の専門分野における具体的な目標に基づいた英語教育であるために、この「実行動機づけ」が効果的に行われることが期待されるといえる。

本稿で紹介する、武蔵野大学環境学部環境学科環境学専攻の「環境英語」科目におけるESP教育は、櫻井・岡野（2011）でその概要が説明されているが、2010年度に新設され、2011年度に2年目を迎えている。武蔵野大学での「環境英語」科目では、1年生は、学科の必修科目として「環境英語入門1、2」を履修し、その後、2年生の選択科目として、「環境英語1、2」を、3年生以上の選択科目として「環境英語3、4」を履修することができる。本稿で事例研究として取り上げる1年生の学科必修科目の「環境英語入門1、2」は、英語の習熟度により4クラス（各24名）に分け、習熟度の高い順にa、b、c、dクラスとなっている。また、科目の到達目標は、「環境分野に関する専門的文献等の英語に身近に触れることによって、環境学を国際的視点から専門的に学び、代表的な環境トピックを英語で理解できるようになること」と設定されている。シラバスでは、その授業概要として、「環境分野の様々なトピックについての英文を読んだり聞いたりすることで、環境分野についての話題がどのように英語で表現されるのかを理解し、そのトピックについての自分の意見を英語で話す書くなどにより発信できるように学習する」と説明されている。つまり、「環境英語入門1、2」は、英語の4技能のうち、リーディングやリスニングなどの受容型のスキルの向上にとどまらず、そのようにして得られた情報を、自分でどう考えるのかを英語で表現するという発信型のスキルの向上を目指している科目である。

櫻井・岡野（2011）では、2010年度の実践をふまえ、「環境英語」科目の可能性について論じているが、そこでの学習者へのアンケートからもわかるように、専攻分野である環境学を意識した学びへの期待は高く、特に、専攻分野に関わる課題について、自分の意見をまとめて発表するような発信型の英語能力の学習についての満足度が高かった。この初年度の取り組みとその結果をふまえ、2011年度の授業では、「環境」というジャンルにおいての、スキルとしての英語の習得のみを目的とするのではなく、それを発信する、という、コミュニケーションの手段としての英語の習得を目標に据え実践している。

本稿で紹介するライティングの課題は、「環境英語入門 1、2」の b クラスで行われたものであり、プレゼンテーションの課題は、a クラスで行われたものである。次節では、英語教育における動機づけの有効性について説明し、「環境英語入門 1、2」のクラスでの課題において、その動機づけがどのような効果をもたらしたのかについて考察する。

3. 英語教育における動機づけ

英語教育に限らず、いかなる学習活動も、その効果は学習者の動機づけに左右されるところが大きい。動機づけの方法としては、①学習目標を明らかにし、②おどろきや疑問を投げかけ、興味をもたせ、③学習結果の知識を与え、④賞罰を適切に与え、⑤成功感・失敗感を与え、⑥競争や協同場面を利用すること（『教育学小辞典』2000）があげられる。

それらに加え、Dornyei (2005) は、外国語学習には長期にわたる学習が必要であるという点に着目し、学習者の動機づけが長期間、安定して継続するために、時間軸にそって、いくつかの異なる動機づけが必要であることを提示している。第一段階は動機づけを生み出す「選択動機づけ(Choice Motivation)」、第二段階は「実行動機づけ(executive motivation)」の段階、そして第三段階が「動機づけを高める追観(motivational retrospection)」の段階である。これらは順に「行動前段階」「行動段階」「行動後段階」である。

この3段階は一連の過程として捉えるべきだが、留意すべき点は動機づけを発生させる段階と動機づけを維持させる段階では異なるアプローチが必要だということである。特に、教室という環境の中では、動機づけを維持し高めるような状況をいかに作りだすかが重要であり、その中でも外国語学習という継続的な学習では、本稿2節において触れた「体系的で長続きするプラスの効果を実現するために、意識的に与えられる動機づけの影響」であるストラテジーを教師が駆使することが肝要であるといえよう。

Dornyei (2005) はこの3段階を基とし、それらを改めて「動機づけのための基礎的な環境を作り出す」「学習開始時に動機づけを喚起する」「動機づけを維持し保護する」「肯定的な追観自己評価を促進する」の4つに区分し直し、それぞれの領域における指導実践を提示しているが、そのうち、「動機づけの維持と保護」の段階に関する下位領域は以下である。

- 学習をワクワクして楽しいものにする。
- 動機づけを高めるようにタスクを提示する。
- 具体的な学習目標を設定する。
- 学習者の自尊感情を大切にし、自信を高める。
- 肯定的な社会的心象を維持させる。
- 学習者自律性を育む。
- 自己動機づけストラテジーを推奨する。
- 仲間同士の協力を推奨する。

(Dornyei, 2005, p.32)

本稿において次に述べる「環境英語入門 1、2」での取り組みはこの提案に沿った内容

をもつものであり、Dornyei (2005) の提案の有用性を示すものとする。

4. 環境英語入門 1、2 での取り組み

4. 1. ライティングの課題

「環境英語入門 1、2」の b クラスでは、通常の授業は全クラス共通教科書である *You, Me and the World* (Peaty, 2010) を共通進度で進め、中間試験と期末試験において Dornyei の言う上記 8 項目をより意識した独自のタスクを課した。そのうち、前期中間試験での課題を紹介する。

この課題は基本的には教科書 Unit 2 のライティング課題のひとつのトピックとして与えられているもので、自分を絶滅危惧種の一つと仮定し、救済を求めるアピールを書くというもの。その課題に対し、学生の動機づけを維持、保護する意図で次のような仕掛けをした。まず、中間試験 2 週間前に、「地球からの手紙」(井本、1995) という絵本を紹介した。この絵本は当時 12 歳の渡英 5 年目の日本人小学生が全英の子どもたち対象の手紙コンクール "Royal Mail Young-letter Writers National Competition" に応募し、小学校上級の部で 1 位に選ばれた手紙を、その後、本人が日本語に訳したもので、絵本として日本の出版社から出版されたものである。内容は著者が『地球を守ろう』という気持ちを火星の手紙にして」(井本、1995、p.23) 書いたもので、巻末にもととの英文手紙、著者の日本語での挨拶文とプロフィールが掲載されている。b クラスの学生には、その部分を配布し、絵本はページをめくりながら、教師が朗読して聞かせた。

著者は滞英 5 年目とはいえ、巻末の挨拶文には渡英するまで英語は全く話せず、回りに助けられて英語を身につけていったこと、受賞に際し、周囲の人たちからおおいに祝福を受けたことが書かれてあり、そのような 12 歳の日本人少女の作品が応募数 3,160,001 通の中から選ばれ、優勝したことが学生たちの驚きとなった。また同時に、成功体験のモデルとして刺激を与えることになった。

課題については、次週に向け、各自、興味をもつ絶滅危惧種の実情やこれまでの救済策等をインターネット等で調べ、英語で救済を求める文章を書いてくるように指示した。この時点では、手紙形式にすることも英文手紙の書き方も指示することはなかった。そして 2 週目の授業時、それぞれが書いてきた英文を 3〜4 人のグループで交換し読み合った。このときは、お互いのものを比較することで、自分の書き方や情報量の不足分を友人の作品から学んだり、英語の間違いや表現方法で気がつく点を指摘しあうように促した。さらに教師は井本 (1995) の巻末英文手紙に基づき、英文手紙の書き方を説明し、次週の試験では手紙形式にのっとった形にするように伝えた。また、採点に関しては、内容面を重視をし、細かい英語のミスは減点しないが、手紙であることと、パラグラフ構成ができていることを条件とした。

結果として、b クラス 24 名で平均 37 点 (配点 40 点中) という達成度の高い作品がそろった。つまり、何らかの絶滅危惧種が現状を具体的に述べ、それに対し、どのような対策が施されているか、何も施されていないか、今後どのような対策が望まれるかについて、想定上の相手に対し、絶滅危惧種になりきって書かれている手紙文であり、教師の期待を上回るものが続出した。

2、3の例を示すと、ボルネオに住んでいるオラウンタンが森林伐採のため、自分たちの生活が危うくなっていること、それは自分たちにとってばかりでなく、人類にとっても危機的な状況であることを「森の番人」として APP(Asia Pulp and Paper)の会長あてに訴えている手紙、またジュゴンがまず昔を懐かしみ、その後、人間の食用になったり、釣り針によって傷つけられたり、沖縄軍のせいで餌場が減少していることなどを述べ、これ以上、自分たちが生息できる海を取り上げないでほしいと環境大臣に頼む手紙、イヌワシが農林水産大臣に宛てた手紙では、自分は山形県に住んでいるが、近隣の仲間たちと東京に行ったら、高層ビルが林立していることを目の当たりにし、今後日本で木材の伐採やダム建設も含め、都市化が進行し続けるのだろうか、そうだとしたら我々は絶滅してしまう、森を守ってほしいという手紙などである。(参考資料1)

この課題を第3節で記述した Dornyei (2005) の「動機づけの維持と保護」の下位領域に照合してみると、井本の絵本および英文を導入したことで、課題の全体像ともいべき具体的な目標が設定され、自分たちの行っている学習活動が社会的にも意味のあるものであるという意識を持ちながら取り組めたようである。また、準備期間を十分にとり、2週目にはグループでの交流をもたせたこと、内容重視の採点項目を明示したことによって、自信をもって臨むことにつながったと考える。試験前日、大学の図書館ではbクラスの学生たちの多くが熱心に準備していたことも報告されている。付言するが、期末試験ではエネルギーを大切にしている取り組みを調査し、それについて自分の意見を加えて書くことを課題にしたところ、中間試験答案より質・量とも明らかに向上が見られる文章が集まり、学生の動機づけが肯定的に推移していることが確認できた。それについての紹介、考察はまた別の機会に譲りたい。

4. 2. プレゼンテーションの課題

「環境英語入門1、2」のaクラスでは、前節で述べた全クラス共通教科書である *You, Me and the World* (Peaty, 2010) を進めると同時に、授業内で、教科書で取り上げた環境に関するトピックについてプレゼンテーションを行うタスクを課した。トピックは各ユニットの Discussion のセクションに記載されている議題の中から自由に選ぶものとした。

プレゼンテーションを行うにあたり、大学における ESP では卒業後の専門分野においての英語によるコミュニケーション能力の育成を目指しているという理解から、個人によるプレゼンテーションではなく、チームワークやリーダーシップといった力が必要とされるグループによるプレゼンテーションを行うこととした。ここでは、教員は知識や技能を伝える提供者ではなく、授業を進行する役割を果たすことになり、寺内編 (2010) の ESP の指導実践でいわれている「提言1：自律（自立）した学習者を育成するという意識を持つ」ことができる考えた。

グループ分けは、履修者に議題の中から興味のあるトピックを選んで提出してもらい、その結果により教員が行った。以下に各グループの学生が選んだ議題について紹介する。

表1 「環境英語入門1」(aクラス)のプレゼンテーションの議題

グループ	議題
A	Prepare a simple plan for making your school self-sufficient in energy.
B	A major debate has focused on two different approaches for global warming: 1) to prevent it and 2) to mitigate it. Consider both approaches.
C	How do you think global warming will effect biodiversity?
D	Where and how could you travel and where could you stay without harming environment?
E	Japan accepts very few refugees. What do you think about this?
F	Should the debts of poor countries be cancelled?

各グループは10分(発表)+5分(質疑)の持ち時間で、プレゼンテーションソフトウェアを使用して英語での発表を行った。プレゼンテーションにあたっては、4週間を準備期間として与え、その間の授業内に、各20分間ほどの作業時間を持つことにし、グループのメンバーの間で、または教員に相談する時間を設けた。教員は、発音指導、文法指導(提示する資料および口頭で話す内容について)、構成について指導し、履修者は段階を踏んでプレゼンテーションを仕上げていき、プレゼンテーションの1週間前には、リハーサルを行うようにした。参考資料2として、プレゼンテーションのスライドの実例を提示する。

プレゼンテーションは、表2のような評価シートに基づき、教員と参加聴衆(クラスの履修者)の全員が行った。

表2 プレゼンテーションの評価シート

	5	4	3	2	1
発表内容(明確さ、独自性、説得力等)					
英語(分かりやすさ、発音、適切な語・構文か)					
プレゼンテーションスキル(スライド、声、体勢等)					

コメント

良かった点:

改善点:

また、発表終了後には、自由記述のアンケートを行い、プレゼンテーションを行った感想を集めた。感想には、「初めて、自分で英語で意見が言えた気がした」、「グループで作業したので、自分が苦手なところを他の人が助けてくれたのでよかった」など肯定的なものが多くあり、一方で、「もう少しプレゼンの時間が長ければよかった」、「質疑も英語でやったほうがよりよいと思う」などの改善の意見が寄せられた。総じて、受講者は、プレゼンテーションの課題を評価しており、その評価は、専門分野を英語で学んでみたいという初期の動機を、プレゼンテーションを通じて、自分の考えをクラスメートと共有するという持続的な動機に

つなげ、最後に評価シートやアンケートで振り返ることによって動機づけをより肯定的なものにできたからであろうと考えられる。

5. 結論及び今後の課題と展望

本稿では、事例研究として、武蔵野大学環境学部環境学科環境学専攻で開講されている「環境英語入門 1、2」における、「実行動機づけ」の役割と成果を紹介した。「環境英語入門 1、2」の到達目標は、「環境に関するトピックを英語で理解することにより、よりグローバルな視点から自分の意見を英語で発信できるようになる」というものである。このような、ある特定の目的を達成するための ESP においては、「専門分野について英語で勉強する」という目新しいものであるために、学生の期待値は高い傾向にあり、初期動機づけは成功しやすいと言えよう。

しかしながら、本稿で述べられてきたように、「実行動機づけ」は、段階を追って達成されるべきものであり、初期動機づけは、その後の授業の中で、さらに強い動機づけを伴って、学生の達成につなげていかれるべきである。

Dornyei (2005) は、動機づけについて、「動機づけのための基礎的な環境を作り出す」「学習開始時に動機づけを喚起する」「動機づけを維持し保護する」「肯定的な追観自己評価を促進する」の 4 つに区分したが、本稿は、後の 2 区分である、「動機づけを維持し保護する」「肯定的な追観自己評価を促進する」という段階が、ESP 教育では重要であるという示唆を与えている。「環境英語入門 1、2」の b クラスでのライティングの課題、a クラスでのプレゼンテーションの課題については、それぞれ、手紙や議題という形で環境問題について考察をする基本的な環境を作り出し、それを維持するために、ピアリーディングやグループプレゼンテーションといった共同で行うタスクを課し、最終段階として、エッセイやプレゼンテーションの評価を通じて、学習者自身がこのタスクで何を学んだかを振り返られるようなプログラムが組まれている。このことにより、英語教育で近年重要だと考えられ焦点が当てられている書く力、話す力といった発信型のスキルが効果的に習得されるのではないかと考える。

大学の英語教育において ESP が注目されているのは、学習者の専門分野における実用的なスキルとしての英語能力を習得することが、卒業後に実際に英語を「使える」ようにつながるからだと考えられているからであろう。しかしながら、ESP については、専門分野での話題を英語で読んでみた、というような、極めて表層的なものになりやすいという批判もある。今後の ESP は、学習者が、授業内に特定の分野についての英語を学習するのにとどまらず、授業をはなれても、自分が興味をもつ特定の分野について英語を用いて追究していけるような学習者を育てるカリキュラムを作ることが期待されていると言える。そして、これを実現させるためには、学生への動機づけは、授業後も「動機づけを維持し保護する」ことができるような工夫がなされるべきである。また、その中で、自分を述べるというような発信型の英語能力は大きな役割を果たすと期待されている。

ESP において、自律的な学習者を育成するためには、どのようなカリキュラムが効果的なのか。この問いへの答えの第一歩として、本稿では、武蔵野大学での事例研究を紹介し、長いスパンでの「実行動機づけ」がその鍵となることを論じてきた。今後、武蔵野大学の「環

境英語入門 1、2」では、引き続き、書く力や話す力といった発信型の英語のスキルの習得を目指し、学習者が英語学習を行う目的を自ら設定し、それを実現できるような授業を行っていきたいと考えている。

参考文献

Dornyei, Zoltan (2005) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』 東京：大修館書店.

井本由紀 (1995) 『地球からの手紙』 東京：文化出版局.

Peaty, David (2010) *You, Me and the World, 2nd Edition*. Tokyo: Kinseido.

櫻井千佳子・岡野恵 (2011) 「環境英語科目の事例：英語教育と専門教育の協働を目指して」 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』 第 1 号：67-83.

寺内一（編） (2010) 『21 世紀の ESP』 東京：大修館書店.

鳥飼玖美子 (2011) 『国際共通語としての英語』 東京：講談社.

山田栄（編）(2000) 『教育学小辞典』 東京：協同出版.

参考資料１ ライティングの課題の実例

(英文は学生提出のまま、学生氏名は個人情報保護のため記載省略)

(１) ジュゴンから環境大臣宛ての手紙

Mr. Ryu Matsumoto

Minister of Environment

Dear Mr. Matsumoto

I beg of you, please help us!

We had been lived with human. I have heard by my grandfather, you called us “mermaid” and were friendly with us, which was very happy thing for us.

But many friends had left here because you started to eat us without notice. And we eat in the shoals near the land. So, recently it has increased in died friends because it hangs to the net of the fishery and it is drowed, and it is damaged by called the screw that is attached to the ship.

I am living near by the area that people say Okinawa, but there are only several heds left in my village. In addition, it is said that our feeding stations may be decreasing to set up the military base.

We hope to live in peace with you again. So, please take away the place to live from us more. Our future depends on you.

Yours sincerely,

Dugong dugon

(２) イヌワシから農林水産省大臣宛ての手紙

Mr. Kano

The Minister of Agriculture, Forestry and Fisheries

Dear Mr. Kano

I am a golden eagle. I live in Yamagata prefecture now. I went on a trip to Tokyo in the neighborhood association the other day. I was surprised to arrive at Tokyo. Because it was a city where were built skyscrapers and hypermarkets.

Hereafter, will the urbanization of Japan continue? Recently, the place where we live has decreased because of the harvesting timber and the dam construction. If you advance urbanization, we will be died out.

I want to leave a beautiful forest for posterity. I think that beauty and the value of nature are understood because you are residents of Yamagata prefecture.

Please do not advance urbanization any further. Thank you very much.

Yours Sincerely,

Golden Eagle

School Self-Sufficient

- Name 1 ●Name 2
- Name 3 ●Name 4

Solar power generation

□ **Disadvantage**

- Electric power is influenced by weather.
- Cost a lot of money when solar panel sets up.
- Limit to 1500 watt(1.5 kilo watt)
- Can't generate at night



Table of contents

- 1 The Present Situation
- 2 Idea
 - (a) Solar power generation
 - (b) Wind power generation
- 3 Solutions

Wind power generation

□ **Advantage**

- No pollution
- Provide unlimited energy



The Present Situation

- The building of number 8 at Musashino University emits one-third of carbon dioxide of our university.
- We tend to leave the light on in lecture room at rest time when there is no people.
- When it rains, we tend to use vinyl bag to put umbrella.

Wind power generation

□ **Disadvantages**

- Wind power is influenced by wind speed.
- Cost a lot of money but amount of power generation is little.
- Noise pollution
- Need a large spaces
- Danger of bird dying



Solar power generation

□ **Advantages**

- Replace as Emergency power source.
- No coolant, No waste, No exhaust.
- Needn't secure large spaces.
- Don't depend on fossil fuel.
- Emit little the greenhouse effect gas.
- Improve self sufficient in energy.



We can't generate energy efficiently.

Large Expende

Large Spaces



We have to save electricity.

Solutions

☐ **Ban** setting up air conditioner less than 28 degrees.

☐ **Designate** the lecture room where we eat lunch.

References

<http://www.env.go.jp/>
<http://www.tcs-net.ne.jp/>
<http://www.ecool.jp/>
<http://www.vill.tenei.fukushima.jp/fuuryoku/>
<http://www.mitsubishielectric.co.jp/service/taiyo/>
